

巻頭言

時間がいきいきと流れていく

「看図アプローチ」は、「みること」を重視した授業づくりの方法です。日本の教育は、これまで「読むこと」「書くこと」「話すこと」「聞くこと」の4つの技能によって学力の形成を図ってきました。多くの国々では、4技能に「みること」の指導も加え教育がなされています。我が国では「みること」を重視した授業づくりの研究が遅れています。このことが、日本の子どもたちのPISA学力テストの低迷にもつながっているのではないのでしょうか。「みること」を重視した授業づくりの方法を、日本でももっと研究していく必要があります。

「看図アプローチ」は、協同学習をすすめていくための強力なツールにもなります。「ツール」ですから、使う人の創意工夫によってさまざまな授業をつくることができます。このため、看図アプローチを活用した授業は決して形骸化することはありません。さらに授業づくりの「方法」ですから、看図アプローチの理論を使えば「みる学力＝ビジュアルリテラシー」を育てる授業を簡単につくることができます。

看図アプローチを活用した授業を始めると、学習者たちはきもちよさそうに脳を回転させ始めます。看図アプローチの授業では「主体的で対話的で深い学びの時間」がいきいきと流れていきます。本研究誌に掲載されている田中伸子論文の写真1を見てください。田中論文の中でも解説されていますが、これは、看図アプローチの授業を受けている先生方の写真です。「みつけた」「なるほど」「わかった」「やった～」等々。看図アプローチを活用した授業では、こんな声がしょっちゅうあがってきます。写真1に写っている先生方は、みんな満面の笑顔です。中には「バンザイ」をしてしまっている先生もいます。このような「心動かす授業」をできるだけ多くの児童生徒・学生たちに届けてあげたくて、この研究誌を編みました。「研究誌」と言っても、堅苦しいものではありません。全国で看図アプローチの授業づくりや実践に取り組んでいる先生方が、それぞれの実践や研究をわかりやすく伝えていく場として活用したいと思っています。

看図アプローチは汎用性の高い授業づくりの方法です。本研究誌に掲載されていく論文を参考にして、先生方の日々の実践を豊かにしていただければ幸いです。

論文の投稿も大歓迎です。多くの先生方のお力を借りて、看図アプローチから生まれる「生きている感じ」を、学びの場にいる多くの児童生徒・学生・地域の方々に届けていきたいと願っています。どうぞよろしく願いいたします。

2019年12月3日

文責 鹿内信善